大阪では今、財政難によって文化事業予算が大幅に削減され、先人が長い歳月をかけて培ってきた文化の森が伐採されようとしています。設立以来「文化の力で大阪に活力を!」と活動を続ける大阪21世紀協会は、そうした状況に強い危機感を持ち、文化の灯を守ろうというメッセージを発信するとともに、新たな可能性を提案していきたいと考えています。そこでこの度、当協会主催「21cafe」において緊急座談会を開催。各界でご活躍の方々に、これからの大阪の文化戦略について、さまざまな提言をいただきました。

（2009年2月16日・大阪大学中之島センターにて実施）

春野恵子（はるのけいこ）**氏**
浪曲師。2003年・二代目春野百合子に弟子入り、若手浪曲ユニット『新星浪曲☆新宣組』など東西で活躍

佐藤徳夫（さとうとくお）**氏**
関西プレスクラブ企画委員長、「京都21世紀教育創造フォーラム」「京都教育懇話会」にも参画

司会：堀井良殷（ほりいよしたね）
財団法人大阪21世紀協会理事長

ましたね。これは人間をずいぶん文化的に変えるものだと思いました。オペラやオーケストラが聴けるし、歌舞伎や文楽も気軽に楽しめる。また、親しい仲間と盃を傾けながら、おしゃべりや議論の花を咲かせることもできる。講演会などにも結構参加するようになりましたね。国際女子マラソンがはじまると聞けば、すぐその現場に行けますし、長居陸上競技場で行われた世界陸上も2度行ってきましたよ。私は、そうして直に感じ、生活の中に溶け込んでいるものを文化として大事にしたいと思っています。ところで大阪では、工場は海外へ逃げ、企業の本社は東京に移り、大学も住民も郊外に行ってしまいました。こんなところに文化は残るのでしょうか。もうすでにかなりの文化の木々が枯れてしまったのではないでしょうか。いずれにしろ、100年に1度の経済危機といわれるなかで、雇用が守れなくなり、福祉や教育も削減しなくてはならない状況下で文化をどう考えるかという問題であることを、しっかり意識しておくべきだと思います。私はパナソニックに40年強勤めましたが、創業者の松下幸之助は「不況また良し」という言葉を残しました。つまり、不況は過去の栄光や慢心に警鐘を打ち、今を見直すチャンスであるというのです。その視点で申し上げると、私は文化施策に対して2つのことを考えなくてはならないと思っています。ひとつは「なぜこんな状態になるまで、我々は手を打つことができなかったのか」、もうひとつは「文化の何を伐採し、何を残そうとしているのか」。つまり選択と集中によって、どんな新しい文化をつくろうとしているのかを検討すべきでしょう。国や自治体の再構築が求められている時代にあっては、今まさに文化を再構築するチャンスであると思います。

我々の時代で潰してはならない

堀井　文化といっても人によってさまざまなイメージがあります。